

今日、
私は母を捨てます。



母は娘を嫌い、息子を好む。

そんなことをどこかの本で読んだ覚えがある。

娘は自分と似ていて同族嫌悪に陥りやすく、その結果息子のほうを好むらしい。

たしかに、母は姉や私のことを嫌っている。

だが姉は結婚し子供を授かり、同じ立場で語れるということで、母は姉を受け入れた。

今では頼れる相手として信頼しているようだが、残された私はといえば、相変わらず嫌われたままだ。

虐待に分類されるような、明確な暴力はなかった。

ビンタをされて鼻血が出ることはあったし、翌日まで手の跡が頬に残ったこともあるが、どれも「躰」だと周りは判断した。

だから正直、暴力と躰の違いが私はいまだに分からない。

愛があるか無いかの違いだとカウンセラーには言われたが、血が出たり、翌日まで跡が残るそれらに、本当に愛があるのだろうか。

3~4歳の時、母の愛を初めて疑ったある事件が起きる。

祖母の家に行くと、母は必ず祖母と喧嘩をしていた。

お互い離れた場所に住んでいるから、滅多に会わないのだが...だからこそ、一度喧嘩が始まるとずいぶん長く続く。

そんな中、私はご先祖様の仏壇に線香をあげたくなったのだ。

どうか、母と祖母が仲良くなるよう手伝ってくださいと、そうお願いしたかった。

祖母の家にはマッチしかないので、線香に火をつけるには、マッチを使うしかない。

だがもちろん、幼い私が使うことは禁じられていた。

しかし喧嘩している母と祖母の間に割って入ることも、私には出来なかった。

自分のせいで喧嘩が悪化することを恐れて、ではない。

母の怒りの矛先が、私に向くことを恐れたからだ。

今思うにこの時から私は、母の存在がとても恐ろしかったのかもしれない。

ともかく、どうしても線香に火をつけたかった私は、バレないようにこっそりマッチに火をつけた。

考えればわかるが、その考える頭を持っていなかった私は、すぐ線香の匂いでバレてしまい、結局母にひどく叱れた。

平手打ちを2回。左頬が火傷をしたかのように熱く、ずきずきとした。口の中を切ったのか、血の味もしたのを覚えている。

どうしてマッチで遊んだんだ！！と怒鳴られ、それからもう1回平手打ち。頬の痛みは分からなくなり、そのかわり鼻血が出た。

遊んだわけではない。ただ、私はご先祖様にお願いをしたかっただけなのだ。

「もうそのくらいでいいでしょう。可哀そうに、こんなに頼っぺたが赤くなって…」

祖母の言葉に母は、キツともともと吊り上がっていた目を、さらにきつくさせ

「私の手の方が痛いわよ！！！」

と言い放った。

鼻血を垂れ流し、充血するほど瞳から涙を流している娘より、目の前にいる「母親」と呼ばれる女性は、自分の手のことを気にしている。

私はこの時、もしかしたら母は私のことを好きではないのかもしれないと、そう思った。

これが愛の躰だというなら、たぶん母が私の首をしめても躰になるに違いない。

殺されて初めて、虐待とされるのだろう。それならいっそ、早く母が私のことを殺してくれないだろうか。

中学1年生。

中学1年生のとき。

私は怒られることに、異常なまでの恐怖心を抱いていた。

食器を割ることもすごく怖かったし、服を汚すことも怖い。

傘を無くした日には、お母さんに殺される...どうしよう...と泣きながら傘を探し回った。

(もちろん、命の危険を感じるような暴力を受けたわけではないが、母の言葉が確実に私の心を殺していたのを、どうか分かってほしい。)

だから私は、常に正しくあろうとした。生徒会に入り、風紀委員にもなった。

毎朝校門の前に立って挨拶運動に参加し、ゴミを拾い集めながら、風紀の乱れをチェックをする。

そんな、誰もやりたがらないことも、私は率先してやった。

風紀をチェックするとは、具体的になにをするのかというと、スカートの長さや化粧について指摘したりすることだ。

男性教員が多かったため、女子に注意できなかったのだろう。私という存在が、教員たちの中で非常に有難がられた。

それに比例して、私は学年問わず生徒から嫌がらせを受けることが増えた。

私の恐怖心からくる清く正しいことは、周りの生徒にとっては厳しすぎたのかもしれない。

中学1年の春から冬にかけて、私はいじめられるようになった。

誰にも話しかけられず、教科書がボロボロにされ、吹奏楽部で使っていた楽譜もごみと一緒に捨てられた。

休み時間の私の居場所といえば、教員用トイレ。そこが一番安全だったからだ。

いよいよいじめに耐えられなくなった私は、夏から秋にかけて、何度も母に相談した。

そのたび母は、

「周りが変わるわけがない。自分が変わるしかない」

「夜穂よりつらい思いしてる人は、たくさんいる」

「お母さんだって昔は...」

それから最後に決まって「頑張りなさい」と言った。

まるで、お前は頑張っていないと言いたげな口ぶりで、そう言うのだ。

私は母に何を言ってもダメかもしれないと思った。

秋から冬にかけて、私は怒られるのを承知で学校を休みたいと、母に伝えた。

毎晩見たくもない悪夢にうなされ、ひどく痛む胃に嘔吐することもあり、心よりも前に体が限界を迎えた。

この頃は一瞬でも気を抜くと、いつの間にか高い所に立っていたり、道路の真ん中でぼーっと立

っていたりして、自分がすごく恐ろしかった。

だから気を抜かないように、少しでも死にたいと思わないように、リストカットを始めた。痛みで、自分を保てるとそう錯覚していたのだ。

だが、母は私の悲痛な願いを受け入れはしなかった。

「誰のお金で学校行かせてもらってると思ってるの！」

「休んで何が変わるっていうの！」

「お母さんに、ずる休みさせてくださいって言わせる気?!」

責めたてるような言葉が、私の心をズタズタにした。母に休みたいと言った回数だけ、リストカットの回数も増えた。

寝ても起きても、どうやって死のうか考えるようになった。

私は母に何を言ってもダメだと思った。

何も言わなくなった私は、12月初旬。

学校のトイレでリストカットをして、血を止めることもなく、そのまま死のうとした。

そう。いじめが冬で終わったわけでない。私の手で、何もかもを終わらせたのだ。

目が覚めた時に、白い天井が見えた。

自殺しても天国に行けるのか...と喜んだが

“大事にしないために、救急車は呼びませんでした。でも、すぐ病院で診てもらった方がいいと思います。”

聞こえてきた養護教諭の言葉に、私はひどく落胆した。

死ねなかったのか。私は、死ねなかったんだ。

それと同時に、母に怒られるかもしれない、どうしよう...と怖くなった。

こんな時にでも、私は母に怒られることを恐れたのだ。

だが予想に反して母は、私のことを怒らなかった。だが、こう言った。

「こうする前に、今度からはちゃんと言ってね。言わないと伝わらないでしょう？」

にっこりと、優しくそうな顔で、そう言ったのだ。

母は、私が何度も訴えてきたことを、全部なかったことにした。

何も言わずに、だれにも助けを求めなかった、愚かな娘だと言い放ったのだ。

それだけではない。母は私がいる目の前で、養護教諭に

「リストカットも、軽い気持ちでつけたんだと思います。だから大丈夫です」

と言った。

大丈夫なことなんて、何一つないのに、何が大丈夫なのか。

死にたいという気持ちと、あれだけ必死に戦っていた私は、軽い気持ちだったのか...いや違う

。

今まで思いとどまっていたのも、私は母のことは好きだったし、愛していたからだ。

母が私を愛していなかったとしても、痛い思いをして産んでくれた恩もあった。

だから、簡単に死ぬなんてできない。まだ生きなきゃだめだと、そう必死に抗っていたのだ。

それなのに、どうして。

それから私は、声を失った。

中学3年生。

中学3年生のとき。

私は学校へ行った。

相変わらず声は出ないままだったが、これ以上の登校拒否を母が許さなかったからだ。

本当は転校したかった。いい思い出が何一つないこの学校に、もう一度行かなければいけない。それだけで私は嘔吐したし、大人になった今でも近づくだけで足が震えるのだから、当時の私の苦しみは相当なものだった。

だがやはり、転校も母は許さなかった。

「転校した先にもいじめがあったらどうするの？そのたび逃げるの？」

と言われたので、私はそれ以上伝えるのをやめた。

それがただの言い訳で、転校にかかる費用がもったいないという理由なのだということを、知っていたからだ。

第一、いじめがどこにもないなんて思ったことは、一度もなかった。

転校した先にいじめがあったなら、そのときは今度はしっかりお母さんたちが支えてあげるからね。一緒に考えるからね。

そう、言ってほしかった。

それでも1年間学校に通えたのは、大切な存在ができたからだ。

こんな私を好きだと言ってくれた、男子生徒。たった1年間の恋人だったが、それでも私に愛をくれた。

自分を愛する方法も教えてくれたし、愛され方も教えてくれた。本当に大切な人。

卒業間近。私はその人を母に紹介した。

本当に素敵な人だったから、母にも知ってほしかった。

私が彼から教わったように、母も愛し方を学んで、ほんの少しでも私を愛してくれないだろうか。

そんな期待もあったようにも思う。

だが、彼と別れてから母はポツリと私に言った。

「もっと可愛い子もいるのに、どうして夜稲を選んだのかしら」

それから今に至るまで、私は自分を認めることも愛すことも出来なくなった。

こんな私を誰かが好きになってくれることもないだろうと、確信すらしている。

彼から教わったことが、母の一言ですべて壊れてしまったのだ。

高校1年生と3年生。

高校1年生のとき。

この時の私は、時代劇にとってもハマっていた。

悪が必ず成敗されるストーリーに、とても安心したからだ。

怒られることがさらに怖くなっていた私は、家では一切遊べなかった。必死で、母に勉強している姿を見せることに集中していたから、学校の休憩時間だけが唯一自由に使える時間だった。

だから休憩時間中に時代劇の本を読んだ。私は誰にも迷惑をかけず、ただ本を読んだ。

だが、そのせいで私はまたいじめられるようになった。

時代劇の本なんて読んで。ダサい。よし、いじめよう。

簡単な理由だ。

そのことを紙に書いて、先生に相談してみたが、

「学校で今時じゃない本を読んでいたんだから、仕方ないだろう」

と言われた。

何も伝えまいと思っていたが、「言わないと伝わらないでしょう？」と言われたくなかったから、母にも相談した。

「そんな本読んでる夜穂が悪いわよ」

と言われた。

どうやら私には、自由に何かをやる権利はないらしかった。

仕方なく読む本を替えることにして、クラスメイト達が好んで読むようなライトノベルにしてみた。

だが今度は母が、それを許さなかったのだ。

「漫画のような本を読んで、冗談じゃない！そんなものにお金を使うなんて...！」

そう言われてから、私は本を読むことをやめた。

正確には、できなくなった...かもしれない。何を読んでいいのか分からなくなってしまったのだ。

でも辛くはなかった。母にそう言われるだろうということは、なんとなくわかっていたからだろう。

教員用トイレが変わらず、学校内で唯一私の居場所だったが、いじめも昔ほどつらく感じることはなかった。

いじめられていると感じた瞬間、記憶がとぶからかもしれない。何も聞こえなくなるのも、便利だった。

ミュージックプレイヤーの持ち込みも禁止されていなかったから、嫌なことから逃避するのに、

好きな音楽を聴くことができたのも手助けになっていた。

それからずっといじめられたまま、高校3年生の秋。

母が癌だと告知された。手術すれば、治るということであまり心配はしなかった。

心配だったのは、母のことよりも弟のことだった。手術は高額で、あまり貯えのない私の家には大打撃。

それ加えて、弟の高校受験。そして私の大学受験と重なっているため、家計は火の車だった。

タイミングの悪いことに、実家暮らしの兄まで職を失ってしまった。

だから私は大学受験をやめ、弟の高校受験のために必要な費用を稼ぐため、バイトを詰め込んだ。

そんな私に母は

「お母さんをだしにして、受験したくないだけでしょ！」

と怒ったが、私の稼ぎが弟の受験に影響していたの確かだ。

高校を卒業していれば、なんとかバイト程度のことはできる。だが、中卒では何もできないだろう。

弟も先の見えない将来に、とても不安がっていたし、そんな中で自分の受験に集中なんてできなかった。

この選択に、私は後悔はない。何度この時に戻れたとしても、同じ選択をするだろう。

だが、母はそんな私を酷く嫌悪したようだ。

弟の受験が無事終わり、合格が決まって...そして母の手術も成功してから、母は私にこういった。

「夜穂は、みそっかすね」

初めて母から直接、価値のない人間だと言われた。

本当にその通りだと思ったが、そんな価値のない人間を産み出したのは、どうしてだろうか。

お腹の中にいるうちに殺してくれればよかったのにと、私は今でもそう思うことがある。

浪人1年目。

浪人1年目。

予備校に通うお金はなかった。だから必要な問題集を買うお金をバイトで稼ぎ、いわゆる宅浪をしていた。

模試や夏期・冬期講習も、なんとか自分のお金で行っていた。

それでも母には私は相当暇な人間だと思われていたようで、

「1日18時間も勉強している人もいるのに...」

と比べられて、溜息をつかれることが増えた。

この頃バイト先で、誰かに怒られたりするのとは変わらずとても怖かったが、どうしてか母に怒られることは何も思わなくなっていた。

だから、何を言われてもだいたいのは受け流せていたし、勉強の合間にPCでゲームをしたり、絵を描いたり好きなことをやろうと思えた。

色々なものに興味を持てるようになったが、興味をもてばもつほど、母の言葉の棘が大きくなっていった。

みそっかす、外れくじ、スカ、

耳にタコができるほど言われたし、それらの後には母は決まって「私はもう死ぬのよ」という言葉も付け足す。

母は私に直接言わなかったが、癌の転移が認められたことを、私はなんとなく感じていた。

だから「死ぬんだ」と言っていたのだろう。

最初は心がざわついたし、休憩する時間も寝る時間も削って勉強もしたが、「死ぬ」という言葉を頻繁に言われたせいか、次第に何も思わなくなった。

あまりにも死ぬ死ぬと言う母の姿に、父も何か思ったのか、私にこっそり教えてくれたが、ちゃんと治療さえすれば治るらしかった。

だから余計に何も思わなくなった。それだけではなく、むしろ早く死んでくれればいいのに...とすら思い始めてしまった私が、すこし怖かった。

そんなある日、

「こんなに苦勞するなら死にたい。死んで、いっそ楽になりたいわ！！」

ヒステリックな声でそうわめきはじめて母に、私の中で平常心でいられる大切な線がプツリと切れたような気がした。

何かが琴線に触れたのかもしれない。

あんな言葉以上のことを言われてきたのに、どうして...?と今でも思うが、この時の私はとにかく

く母に猛烈な怒りを抱いたのだ。

「どうしてそんな事いうの?!お父さんが、どんな思いでお母さんを病院に連れて行って思ってるの?!」

「死にたいと思ったこともないあんたには、分からないわよ!!」

「私にだってあるわよ!死にたいと思った事なんて、山ほどある!!!」

「どうせ死ねないくせに、偉そうなこというんじゃないわよ!そんなこと言うなら、死ねばいいでしょ!!!」

母は、どうやら私が中学生の時に起きたあの出来事を、完全に忘れてしまったようだ。

いや、覚えてはいるのだろう。

だが本気で死のうとしていたとは、これっぽっちも思っていないのだ。

養護教諭に言ったあの言葉は、もしかしたら世間体を気にした言葉だったのかも。本心はきっと違う。そう言い聞かせた時期もあった。

だが、母はあの言葉の通り、あれは軽い気持ちでつけたとそう思っていたのだ。

私はこのとき、近くに置いてあった包丁で母を刺し殺す自分の姿を、初めて想像した。

そして今日、私は母を捨てます。

3月10日。

この文章を書いている時点では、昨日のことだが。

東京大学の合格発表があった。

理Ⅲを希望していたが、足りりは合格したものの二次試験が不合格だった。

悔しさもあったが、なんとなく不合格だろうという予感はしていた。

だから受験が終わったあと、不合格だった場合の計画もたてていたし、勉強も続けていたのだ。

どうしても東京大学に入りたい。だから私は、もう一年頑張るつもりでいる。

父も頑張れ！お前ならやれる！と、後押しをしてくれた。すごく嬉しかった。

だが、母は違う。

泣きわめき、それから一度も顔を合わせようとしてくれない。

私と話すのも苦痛だと言わんばかりに、必要最低限の会話しかしない。

明日から数日、姉の家に行くことにしたが、早く出て行ってほしいのか、普段は絶対に聞かないのに家を出ていく時間を聞かれた。

たぶん、当分はこんな状態だろう。

もう、私は母と娘という関係に疲れてしまった。

親のことは大切にしなさい。

そうどこに行っても教わる。だが、母が私を愛していないときでも、私は母をずっと愛し許していかねばいけないのだろうか。

そうできる自信が、私にはない。

母を刺し殺す自分の姿を想像してからというもの、私は何度も、何度も、何度も、母が死ぬことを願ってしまっている。

こんな自分が嫌でたまらない。

だから私は今日、母を捨てようと思う。

「母」だと思うから、こんなにも傷つき、心をかき乱され、私が私ではいられなくなってしまうのだ。

赤の他人だと思えば、何も感じない。

道に転がっている石を蹴ったあと、その石がどこへいくか、どう思うかなんて、誰も気にしない。

そんな関係に、私はなりたい。

お母さん、今日までありがとうございました。

貴方は貴方なりの苦勞や、困難があったでしょう。

お母さん。貴方が手術を受ける日、貴重品の鍵を預かろうとした私にこう言ったのを、覚えていますか？

「これは家族に預けるから、預からなくていいわよ」

と。貴方にとって私は、家族ではなかった。

そんな私と、同じ屋根の下で暮らすのはとても苦痛だったでしょう。

それでも投げ出さず、暮らさせてくれたこと。学校に行かせてくれたこと、感謝しています。

機嫌がいいときには、嘘でも愛してると言ってくれたことも、嬉しかったです。

貴方のこと、本当に愛してました。

だからこそ今日、私は「お母さん」を捨てます。私のお母さんは、今日、死にました。

貴方とは今日から赤の他人です。貴方は認めないかもしれませんが、もう私はお母さんだとは思わない。

ごめんなさい。そして、これからの貴方の人生が少しでも幸せになりますように。